

高齢化社会を迎えて変形性関節症の重要性はますます高くなっている。運動器を扱う整形外科医は本症のスペシャリストでなければならないが、この分野も最近では日進月歩で、先端知識を理解し、それを実地医療に役立てるのは容易ではない。そうした折から、この書は好適な時宜に広い要望に叶う内容を備えて発行されたと言える。岡山大学整形外科は一貫して、本症をその病理から追及して優れた論文を多数出しておられるが、その総力を挙げて作られた力作である。以下に内容を簡単に紹介する。

第1章・基礎の項は歴史、疫学、病態の3節からなるが、特に病態に17頁を使い、最新の研究成果を盛り込み、かつ図解によりわかりやすく解説してある。この部分が充実していることが、何よりこの書を類書と異なる重厚なものとしたと言える。

第2、3章に診断、鑑別診断が述べられている。CT、MRIの導入以来すぐ画像診断に飛びつく風潮があるが、ここではともかく臨床を大切に、患者をよく診ることが説かれる。この疾患は痛みがもっとも大きな愁訴となるが、一体何が痛いのか、日常臨床では深く考えないことが多い。この章では、痛みは関節由来のものが7項目、関節周囲由来のものが5項目に分類されることが示されているが、こうした本態に常に目をむけた記述が本書の大きな特徴である。

第4章は自然経過と進展である。ここでは臨床問題となるほとんどの関節部位につき自然経過が述べられている。股、膝について詳しいのは当然であるが、肩、肘、脊柱も詳しい。例えば肘のOAが3期に分けられており、それぞれのX線シェーマ、臨床像が述べられている。

第5章が管理・治療である。治療の初めに日常管理を持ってきたところに著者らの姿勢が伺える。確かに手術療法を始め、装具にしる薬物にしる日常の

管理がしっかりしていない限りその効果が限定され、あるいは持続しないことはよく経験されることである。管理の仕方は具体的に記述され、すぐ患者に応用できる。

理学療法、運動療法、薬物療法に続いて手術療法が述べられている。著者らの姿勢は先ず biological healing を目指すという哲学があるようである。ここではそのための骨切り術、デブリドマン、固定術などが各部位につき述べられている。最後に人工関節であるが、これは当然股、膝が詳しい。岡山大学は Mark II 型人工膝を開発し期界の先鞭をつけただけあって、TKR については懇切かつ説得力ある記述がされている。適応の欄を見ても、年齢、術前可動域、関節障害度、変形、動揺性に分け丁寧に説明してある。手術法も当然詳しい。

最後に文献が全部まとめてあるが、ここには244編の文献が並んでいる。それも1993年のものまで含まれているので、同好の研究者には誠に便利であろう。言ってみればこの書はレビューも兼ねていると言えるし、これだけの文献が本書の説得性ある内容を支えているとも言える。

繰り返しになるが、基礎から臨床まで最新の成果を盛り込み、かつ臨床家としての一定のフィロソフィを持つ近來にない好著である。長く読み継がれていくことは間違いあるまい。ただ惜しいことに各章の著者名がない。岡山大学整形外科井上教授以下11名という教室の総力が結集された本で、分担が複雑に入りこんでいるのかもしれないが、読者は読みながら著者に好意や共感を持つであろう。その時、誰が書かれたのかわかることは本書がより多くのファンを得るきっかけとなると考えるので、再版の時にはご考慮頂けると有難いと思う。

(B5版 168頁 6,180円(税込) 1994 医学書院刊)